

読書意識の醸成におけるビブリオバトルの有効性に関する研究

A Study on the Effectiveness of Bibliobattle in Fostering Reading Awareness

川島 隆

要 約

本研究は、読書離れが進んでいると言われる大学生を対象として、ビブリオバトル演習の実施及び質問紙調査、大学図書館における図書の貸出状況調査の分析を通して、大学生の読書に関する実態と、ビブリオバトルが読書意識の醸成にどのように寄与できるかを明らかにすることを目的とする。その結果、(1) 大学生は、決して読書が嫌いではなく、その大切さも十分に認識していること、(2) ビブリオバトルは、読書意識の醸成のために一定の効果が認められたこと、具体的には、「新しい本への興味」「本の魅力への気付き」「勧められたことによる意欲の喚起」「新たなジャンルとの出会い」等がビブリオバトルの中で生まれ、関心の高まりとなっていたこと、(3) ビブリオバトルによる読書行動の変化は、一時的なものであること、以上3点が明らかになった。今後は、ビブリオバトルが本来持つ機能を生かしながら、読書意識を醸成する活用の在り方をさらに検討していきたい。また読書行動を継続的に変容させるために、一過性ではない取組を、学生とともに考え、創っていきたい。

キーワード：読書意識、ビブリオバトル、大学生、読書行動、読書離れ

1. はじめに

大学生をはじめとした読書離れが話題となって久しい(澤崎 2020, 浜島 2019, 平山 2015)。「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(文部科学省 2023)(以下「基本計画」)によると、読書の現状を示す指標である「不読率」は、小中高のいずれの学校段階においても数値目標が達成されないばかりか、上昇の兆しさを見せている。とりわけ、高校段階では、高止まり状態が続いており、半数以上の生徒が、1か月に1冊の本も読まないという現状にある。また、児童生徒が自らの興味や関心に応じて選んだ図書について全校一斉に実施する読書活動は、1990年代から全国的な広がりを見せ、小・中学校では見慣れた光景になってきていたが、このところ、この読書活動にも変化が見え始めている。文部科学省「学校図書館の現状に

関する調査」(2021)結果から、平成27年度と令和元年度の、全校一斉の読書活動を行う学校の割合を比較してみると、小学校97.1%から90.5%、中学校88.5%から85.9%、高等学校42.7%から39.0%、いずれの学校段階でも減少傾向にある。小中高校生の本に向き合う時間が限定されつつあるのである。

つまり、読解力や想像力、思考力、表現力等を養うのに欠くことのできない読書にかかわる問題は、大学生に限らず、全ての教育現場における解決すべき喫緊の課題と言える。

こうした読書離れに対する取組の一つとして、近年、ビブリオバトルが急速に普及しつつある。2007年、谷口忠大氏により考案されたビブリオバトルは、「おすすめの本一冊を持ち寄り、その本の魅力を紹介し合う知的書評ゲーム」であり、①「参加者で本の内容を共有できる」(書誌情報共有機能)、②「ス

スピーチの訓練になる」(スピーチ能力向上機能)、③「いい本が見つかる」(良書探索機能)④「お互いの理解が深まる」(コミュニティ開発機能)という4つの機能を持つとされる(谷口 2012)。本来は、双方向コミュニケーションツールとして役割が大きいと考えられてきた。

そして、このビブリオバトルは、基本計画においても子どもの読書への関心を高める取組の一つとして取り上げられる他、全国の多くの自治体で策定する読書活動推進計画にも言及されるなど(岡野 2022)、読書活動推進への効果が期待されているのである。

また、近年、読書への関心を高めるための手段としての効果を検討する研究も見られ、その有効性も報告されてきている(勝山 2020, 徳永 2020, 鈴木 2016)。

そこで、本研究は、読書離れが進んでいると言われる大学生を対象として、ビブリオバトルの演習を実施し、事前事後の質問紙調査、大学図書館における図書の貸出状況調査の分析を通して、大学生の読書に関する実態と、ビブリオバトルが読書意識の醸成にどのように寄与できるかを明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

(1) 対象者

2021 年度 A 短期大学保育者養成課程 2 年生 116 名(回答 105 名)

(2) 手続き

教育社会学の授業内において、読書教育に係る内容を取り上げ、読書の教育的意義や実態について、講義した後、ビブリオバトル演習を以下の要領で実施する。

- ①1 グループあたり 4~5 名とし、あらかじめ紹介する本を選定、持参させる。
- ②順番に一人 3 分間で本を紹介する。
(メモは読まない、3 分間を使い切る)
- ③ディスカッションを 2 分間で行う。

(質問者 1 人 1 つ質問する。揚げ足取り・批判はしない)

(全参加者がその場が楽しい場となるように配慮する)

- ④全員の発表終了後、「どの本が一番読みたくなったか?」を基準とした投票を参加者全員(1 人 1 票)で行う。
(自分の紹介した本には投票しない)

また、事前に読書に対する意識調査、読書量調査を行う。授業終末に、表 1~3 に示す質問紙調査と 100 文字程度の自由記述作文の時間を確保し、実施した。

表 1 ビブリオバトル体験の実態

- | |
|-------------------|
| (1)初めて知り、初めて体験する |
| (2)知っていたが、初めて体験する |
| (3)過去に体験している |

表 2 ビブリオバトル体験の評価

- | |
|--|
| (a)発表できて楽しかった。 |
| (b)友達の発表が聞けて楽しかった。 |
| (c)ディスカッションタイムに積極的に参加できた。 |
| (d)新しい本と出会えてよかった。 |
| 1 とても当てはまる 2 まあまあ当てはまる
3 あまり当てはまらない 4 全く当てはまらない より選択 |

表 3 ビブリオバトル実施後の変化

- | |
|--|
| (a)紹介された本を読んできたいと思った。 |
| (b)良い本を探したいと思うようになった。 |
| (c)図書館に行く回数が増えた。 |
| (d)本を読む時間が増えた。 |
| (e)またやってみたいと思った。 |
| (f)本の話で友達と話す機会が増えた。 |
| (g)友達の新たな一面を知ることができた。 |
| (h)話をするときの組み立て方がわかるようになった。 |
| (i)伝えたいことをまとめる方法がわかった。 |
| (j)人前で話すことに抵抗が少なくなった。 |
| 1 とても当てはまる 2 まあまあ当てはまる
3 あまり当てはまらない 4 全く当てはまらない より選択 |

さらに、読書行動の変化の指標として、大学図書館における対象学生の図書の貸出状況、入館者数、貸出人数を週単位で集計することとした。なお、表 2 及び表 3 の質問項目は、泉村・青山（2014）、勝山（2020）の調査を参考にしている。質問紙調査については、単純集計処理とした。

3. 結 果

（1）読書に対する意識・読書量の実態

学生の読書に対する意識は、どのような実態にあるのだろうか。「読書は、好きか」、「読書が大切だと思うか」という問いに対する回答は、図 1 及び図 2 に示すとおりである。「好き」26%、「どちらかという好き」43%（合わせて 69%）であり、決して読書が嫌いというわけではない。また、読書が大切だと考える学生は、59%であり、「どちらかとい

うと思う」（38%）と合わせると、97%を占める。ほとんどの学生は、読書は大切だと考えている。

続いて、過去 1 か月の読書量については、図 3 のとおりである。

0 冊、全く読んでいない学生は、半数以上の 56%に及ぶ。1 冊と回答する学生と合わせると、実に 80%に達する結果である。

（2）ビブリオバトルに関する実態・効果

今回演習で実施するビブリオバトルについての事前実態をまとめたのが、図 4 である。「初めて知り、体験する」学生は 64%、「知ってはいたが、初めて体験する」学生が 25%、「過去に体験したことがある」学生が 11%（12 名）であった。内 7 名が高校 1 年生で体験していた。

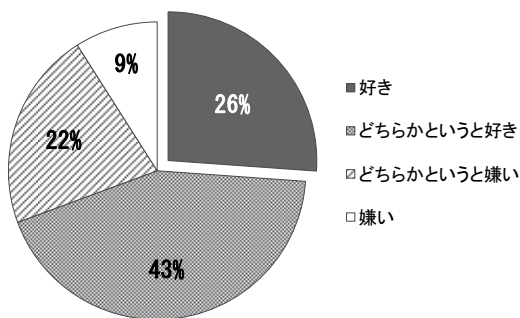


図 1 読書に対する意識①「好きか」

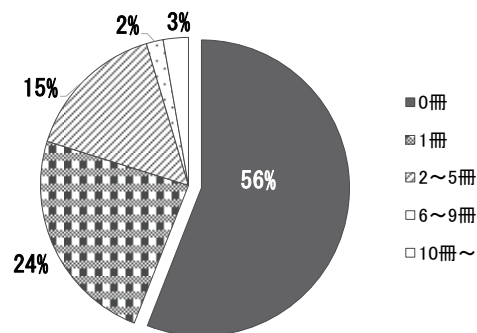


図 3 過去 1 か月の読書量

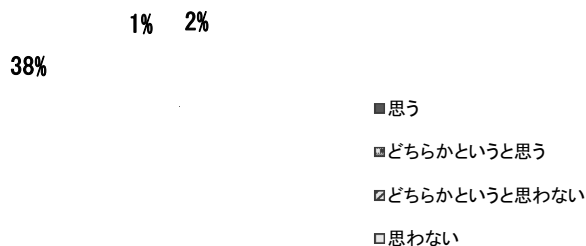


図 2 読書に対する意識②「大切か」

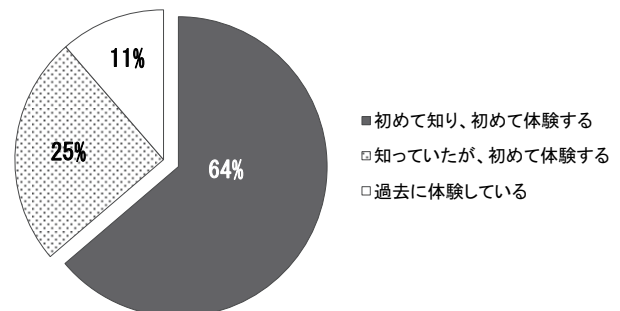


図 4 ビブリオバトル体験の実態

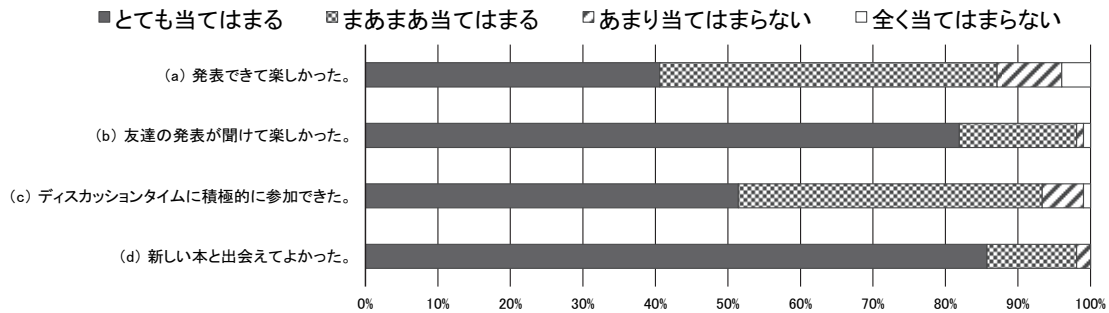


図 5 ビブリオバトル体験の評価

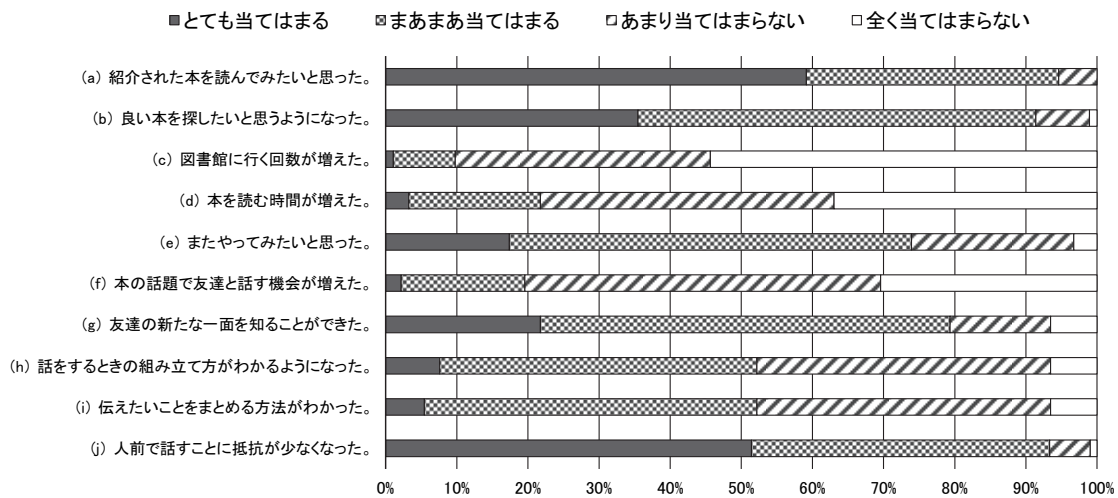


図 6 ビブリオバトル実施後の変化

次に、ビブリオバトル演習の実施後、学生の評価について見てみる。体験の評価は、図 5 に示すとおりである。全体に肯定的な回答が多く見られた。「とても当てはまる」という肯定的な回答が一番多いのは、「新しい本と出会えてよかった」(85.7%)、次いで、「友達の発表が聞けて楽しかった」(81.9%)、「ディスカッションタイムに積極的に参加できた」(51.4%)であった。「発表できて楽しかった」(39.0%)が、最も肯定的な回答が低かった。

また、ビブリオバトル実施後、どのような変化があったかを自己評価させると、図 6 のように、項目間で回答に大きな差が見られる結果となった。肯定的な回答が多く見られたのは、「紹介された本を読んでみたいと思った」(59.1%)、次いで、「人前で話す

ことに抵抗が少なくなった」(51.4%)、「良い本を探したいと思うようになった」(35.5%)であった。一方、否定的な回答(全く当てはまらない)が多く見られた項目は、「図書館に行く回数が増えた」(54.3%)、次いで、「本を読む時間が増えた」(37.0%)、「本の話題で友達と話す機会が増えた」(30.4%)であった。

(3) 図書館貸出状況の変化

読書に関する講義・演習を実施した前後の 13 週にわたって、調査対象とした学年の図書館への入館者数、貸出人数、貸出冊数の調査をまとめたのが、図 7 である。数字は、人数または冊数を示している。また、週によって祝日があるなど日数が異なるが、実数として扱っている。

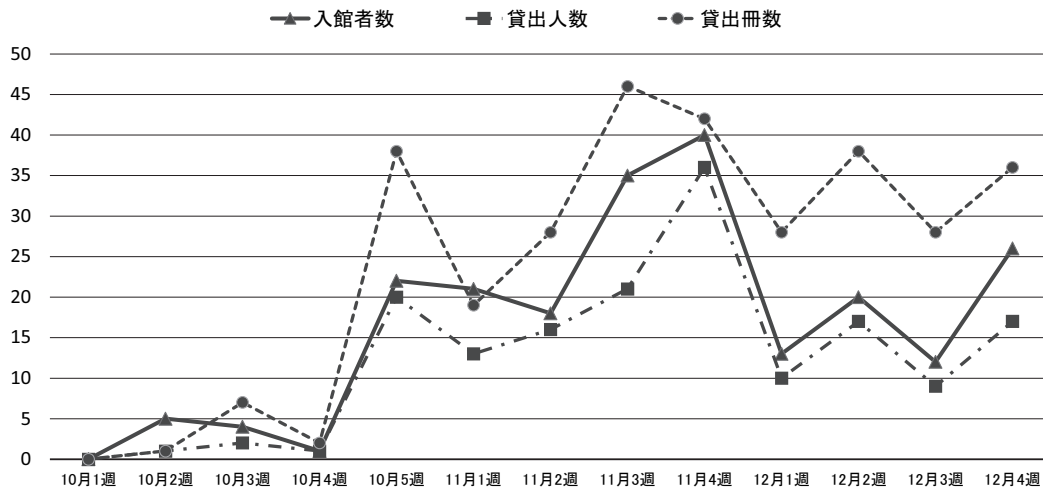


図 7 図書館の利用者数・貸出数の状況（10月1週～12月4週）

読書活動についての講義を行ったのが、11月25日・26日であり、ビブリオバトル演習を実施したのが、翌週11月29日・12月2日であった。事前（11月3週）に選書と呼び掛けておいたことが影響してか、貸出数が最も多いのが、11月3週46冊であった。また、入館者数、貸出人数が最も多かったのが、ともに11月4週（入館者40名、貸出者36名）であった。なお、グラフには、表現されていないが、1月1か月の貸出数は、29冊、貸出人数は31名、2月は、0冊、0人であった。11月138冊、98名、12月127冊、31名と比較すると、2月が春休みに入っていく期間であることを考慮しても、大きな変化と言える。

（4）自由記述作文の内容について

演習後、学生には、「読書」「ビブリオバトル」をテーマとして簡単な記述をさせた（表4及び表5）。

表4の「読書」に関する記述には、自分の「読書経験」（②、⑮、⑱、⑳）を振り返りつつ、「読書のよさ」（⑩、⑪、⑫、⑬、⑰）、「読書の意義」（①、⑤、⑧、⑱）、「読書の課題」（③、④、⑥、⑦、⑭、⑯、㉑）といった内容が見られた。読書というも

のにあらためて向き合い、考える機会になっていたようである。

また、「ビブリオバトル」に関する記述には、「読書への興味・関心の高まり」（②、④、⑫、⑬、⑭）とともに、「紹介することの難しさ」（①、⑧、⑨）や「聞くことのよさ」（③、⑥、⑭）に関する記述が多く見られた。

4. 考 察

（1）読書に対する意識・読書量の実態

浜島（2019）は、2013年から2017年にかけての「生活実態調査」（全国大学生生活協同組合連合会）のデータをもとに、読書習慣のない学生の割合は、40.9%（2013年）から53.9%（2017年）へと増え続けているとの報告をしている。

また、澤崎（2020）は、2009年から2018年の10年間、大学生の読書習慣について調査・報告しており、読書の好き嫌いは大きく変化していないが、読書に費やす時間は明らかに短くなっているとしている。今回の調査においても、大学生は、決して読書が嫌いなのわけではなく、むしろその大切さも十分に認識している。しかし、読書行動には結び付い

表 4 「読書について」の自由記述作文

-
- ① 読書は、何か効果を得るためではなく、自分のために読めばいい。
 - ② 1冊の本に興味を持つとその本を書いた人の他の本が気になり、同じ作者さんの本を買うことが多いです。
 - ③ 私にとって、読書とは、ちょっとめんどくさいものだ。
 - ④ 読書は、嫌いではないけど、暇があっても読書をしようにはならない。
 - ⑤ その人本人が楽しんで読めないことには、あまりその意味がないと思う。
 - ⑥ 少しは読書をした方がよいと感じたが、強制して読むものではないと考える。
 - ⑦ 本を1冊読み切ることのでられる達成感や知識、物の考え方は、実際にそれを感じた人でないと分からないと思うので、やはり中学高校で強制的に朝読書の時間を作ってそのような経験をしてもらうべきだ。
 - ⑧ 読書は、社会に出て行く中で必要な力を身に付けていける大切なことだと思った。
 - ⑨ 久しぶりに本を読みたいと思った。
 - ⑩ 様々な本と出会うことで、その人の中の考えが偏らないのでは。
 - ⑪ 本は、読む人によって人物、風景などのイメージが変わると思います。
 - ⑫ 日本語の美しさや文の構成のきれいさを感じられる所が本のよさだと思う。
 - ⑬ 本屋さんに行くとき、本のおいを嗅ぐと、どのような新しい世界がまたあるのかを考えることができる。
 - ⑭ 大きくなってからは、夢を見るように本を読めなくなってしまったな。
 - ⑮ つらい時によく読書へ逃げていたため、私の中では読書はつらい時の心の拠り所だと思っている。なので、1人でつらい思いをしている人などには読書を勧めたい。
 - ⑯ 読書をすることで得られることが多いことは分かっているけれど、スマホで情報を得ることの方が楽だと感じてしまう部分もある。
 - ⑰ 私が思う読書をするよさは、自己の固定概念にとらわれることなく、色々な人の考え方や感じ方を知ることができ、世界が広がる場所だと思う。読書経験が多い人ほど、相手や人の気持ちを考えるだけでなく、周りが見える洞察力の高い人が多い気がする。
 - ⑱ 私は、幼い頃から週に一度母と兄と図書館に通う習慣があり、それは小学校高学年まで続いていた。私は、そのおかげで本が好きだし、文を読み取るのも不得意ではない。言葉の使い回しなども身に付き、会話するときに役立っていると感じる。
 - ⑲ 私は、小さい頃から読書が好きで、今でも2か月に1冊ぐらいいは本を読んでいる。これは、母の影響が大きいと思っている。母が読書が好きだったため、昔から本は惜しみなく買ってもらっていて、常に身近に本があり、読書のよさを教えてもらっていたので、私も読書が好きなんだと思う。
 - ⑳ 私の読書経験では、スマホで読むのと本で読むのとでは全く違うと感じた。スマホは、読んでいる最中に他の通知がきたり、集中力に欠けるが、読書は余分な通知もないし、集中することができるので、読書は大切だと思った。
-

ていない。調査結果に見る読書量は、危機的な状況にあると言ってよい。この要因は、表4の学生の記述に求めることができる。学生にとって、読書は、「ちょっとめんどくさい

もの」(③)であり、「暇があってもしようというものでもなく」(④)、「スマホで情報を得ることの方が楽」(⑯)なのである。とりわけスマホの存在は、学生を読書から遠

表 5 「ビブリオバトルについて」の自由記述作文

-
- ① 聞いている側の人が「面白そう!」「読んでみたい!」と思えるように話を構成するのが難しかった。そこからスピーチの訓練が身に付いていくのではないかと考えた。
 - ② 今まで本を見ても読みたいや気になると思ったことがあまりなかったけど、ビブリオバトルをすることで、新しい本に興味を持ち、本の魅力に気付くことができた。
 - ③ 自分があまり選ばないような本でも、友達に紹介してもらおうと、読んでみたいという気持ちになると思った。自分の好きな本についてもグループのみんなに知ってもらうことができたので、嬉しかった。
 - ④ ビブリオバトルは、語彙力よりもどれだけその本のよいところや魅力を知っているかなど熱意が大切だと感じた。本を久しぶりに読もうかなという気持ちが芽生えた。
 - ⑤ きちんと読むことで「ここを勧めたい」「読んでほしい」という思いが出てくるのかなと思う。
 - ⑥ 他の人のおすすめの本の紹介を聞くのは、思っていたよりも楽しかったです。
 - ⑦ 本を読むことでいろいろなことが身に付き、自分を成長させるものだったと思った。
 - ⑧ 自分の感じたことを自分の言葉で表現することの難しさを感じた。
 - ⑨ 自分の好きな本を人に伝えることは、難しいと感じた。どのように伝えたら相手にこの本のよさを伝えることができるのか、言葉の遣い方を意識した。
 - ⑩ 私の選んだ本は、いろいろな人に読んでほしいと思っていたので、今回のビブリオバトルで紹介できてよかった。また、自分の知らなかった本に出会えて、読みたいと思える本ができたので、よかった。
 - ⑪ 自分が触れたことのなかった本のジャンルと出会えたり、興味を持てたりするので、とても魅力的な活動だと思う。
 - ⑫ その本を通じて会話が盛り上がり、コミュニケーションがとれた。新学期などクラスや学校が変わった時にビブリオバトルをすると、話をするきっかけにできてよいと思う。久々に読書をしたくなった。
 - ⑬ ある友達が紹介してくれた本は、実話になっている本で、興味深く、今度貸してもらえることになった。新しい本と出会うよい機会だった。
 - ⑭ 本は、自分で選んで読む方がよいと思っていたけれど、人にお勧めされると、もっともっと読みたくなるものなんだなと思った。
 - ⑮ 好きな本を紹介しようと思うと、どうしても文章が長くなってしまいがちでけど、時間が限られていると要約するのが必要になってくるし、本を読み込んでくる必要もあるので、いい勉強になると思った。
-

ざけるものになっていると思われる。今後は、学生が読書に向かうことを妨げている要因を詳細に探る必要がある。

(2) ビブリオバトルに関する実態・効果

半数以上の学生にとって初めての体験となったビブリオバトルについて、どのような評価をしているか、検討してみる。全体に高評価であるが、中でも、「新しい本との出会い」「発表を聞く楽しさ」の2項目が高い評

価を得ている。このことは、勝山（2020）の報告と同様であり、対象が今回とは異なる高校生であるものの、興味深い共通点である。表5の「聞くことのよさ」（③、⑥、⑭）の実感が、この結果に反映していると考えられる。また、「自ら発表（プレゼン）すること」、また、「ディスカッション」が低い評価であったことは、この2つの内容に抵抗感を持つ学生・生徒が少なからず存在することが影響していると考えられる。表5の記述「紹介す

ることの難しさ」(①、⑧、⑨)から、学生の率直な思いをうかがい知ることができる。一方、今回の調査の肯定的な評価の値が、全ての項目で勝山(2020)の報告を大きく上回るものであった。このことについては、今後、詳細な検討を試みていきたいところである。

次に、「ビブリオバトル実施後の変化」の自己評価について、勝山(2020)の報告と比較検討しながら考察を加えたい。

前述のように、本結果は、大きく評価が分かれている。肯定的な評価3項目、「紹介された本を読みたい」、「人前で話すことに抵抗が少なくなった」、「良い本を探したい」と、否定的な評価3項目、「図書館に行く回数が増えた」、「本を読む時間が増えた」、「本の話で友達と話す機会が増えた」である。一方、勝山(2021)の報告では、肯定的な評価項目として、「紹介された本を読みたい」(42%)、「良い本を探したい」(34%)、「友達の新たな一面を知ることができた」(24%)の3つが挙げられている。上位2つは、今回の結果と重なる項目である。また、否定的な評価項目としては、「図書館に行く回数が増えた」(43%)、「本の話で友達と話す機会が増えた」(34%)、「本を読む時間が増えた」(31%)の3つが挙げられ、数値の違いこそあれ全ての項目が今回調査と重なっている。

つまり、ビブリオバトルの効果として、「読書への関心は着実に高まる」と言える。しかし、読書行動の変容に結び付くところまでには至らないと考えられる。もちろん、本稿冒頭で述べたように、ビブリオバトルは、読書行動の変容を目指すものではないのであるから、こうした期待は過剰であると考えなくてはならないだろう。

(3) 図書館貸出状況の変化

これまで述べてきたように、ビブリオバトルによって、読書行動への大きな効果を期待

するものではないが、学生の読書行動の指標の一つとして、大学図書館利用の状況がどのように変化しているかについて考察を加えてみたい。

年間を通してみると、調査対象の大学生による大学図書館の利用率は決して高いとは言えない。図7の10月前半に見るように、入館者、貸出人数、貸出数のいずれも一桁を推移している。数字が上向きになった(11月3週～4週)のは、一つに今回のビブリオバトルの効果があったと考えられるが、貸出図書分野を見ると、それ以外にも授業課題(10月5週)や卒業論文(11月3週)を目的とした利用による影響があったと思われる。

また、結果の項で述べたように、1月以降は、再びグラフは下降線をたどることになる。読書行動の変化は、一時的なものであり、継続されるものではなかったのである。

ビブリオバトルは、読書意識の醸成のために一定の効果が認められることは明らかになったが、大学生の読書行動を変容させ、さらなる読書離れを防ぐためには、さらなる取組・働き掛けを検討する必要がある。

(4) 自由記述作文の内容について

「ビブリオバトル」に関する記述には、「読書への興味・関心の高まり」とともに、「紹介することの難しさ」、「聞くことのよさ」が挙げられた。つまり、ビブリオバトルは、本稿の目的である読書意識の醸成に十分に寄与できることが、学生の言葉からうかがい知ることができるのである。具体的には、「新しい本への興味」「本の魅力への気付き」「勧められたことによる意欲の喚起」「新たなジャンルとの出会い」といったものがビブリオバトルの中で生まれ、関心の高まりとなっているのである。

一方、「紹介することの難しさ」の実感は、言い換えれば、スピーチ能力を向上させることやコミュニケーションを図る技能を身に付

けることにつながるものである。菅沼・岩崎（2018）は、学級経営のツールとしての活用を企図した研究をしているが、それは、ビブリオバトルのこうした機能を生かした試みと言える。ビブリオバトルは、4つの機能を生かした多様な活用の可能性を持っていると考えられる。

また、「読書」に関する記述では、「読書経験」、「読書のよさ」、「読書の意義」、「読書の課題」の4つが挙げられた。読書意識の醸成のためには、「読書のよさ・意義」を実感するとともに、学生が感じている「読書の課題」を、学生とともに解決していくことが重要ではないかと考える。つまり、「面倒ではないものにする」「主体的に読書に親しめるようにする」「読書の時間を生み出していく」等といった観点を持ちながら、読書への意識を変容させていく取組を学生とともに創っていくこと必要ではないかと考える。その意味では、学生の一つ一つの記述をきちんととらえていくことも大事になる。

5. 総合考察

本調査では、以下のことが明らかになった。

- (1) 大学生は、決して読書が嫌いなわけではなく、むしろその大切さも十分に認識している。
- (2) ビブリオバトルには、読書意識の醸成のために一定の効果が認められた。具体的には、「新しい本への興味」「本の魅力への気付き」「勧められたことによる意欲の喚起」「新たなジャンルとの出会い」といったものがビブリオバトルの中で生まれ、関心の高まりとなっていた。
- (3) ビブリオバトルによる読書行動の変化は、一時的なものであり、継続されるものではなかった。

今後は、ビブリオバトルが本来持つ機能を生かしながら、読書意識を醸成するための活

用の在り方を引き続き検討していきたい。また、大学生の読書に対する意識や読書行動を継続的に変容させるために、一過性のものではない取組を、学生とともに考え、創っていく必要がある。同時に、学生が読書に向かうことを妨げている要因を詳細に探る必要がある。

6. 倫理的配慮

論文公表における倫理的配慮に関しては、浜松学院大学短期大学部の倫理審査を受け、承認された。

引用／参考文献

- 澤崎宏一（2020）「大学生の読書習慣が10年間でどう変わったかー静岡県立大学新入生の調査（2009-2018）よりー」国際関係・比較文化研究（19） pp55-79
- 平山祐一郎（2015）「大学生の読書の変化 2006年調査と2012年調査の比較より」読書科学（56）第2号 pp55-64
- 浜島幸司（2019）「読書習慣のない大学生の特性と傾向」 The Basis 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要（9） pp77-88
- 文部科学省「第五次子ども読書活動の推進に関する基本的な計画」，2023.05
- 文部科学省「学校図書館の現状に関する調査」，2021.7.29
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1360318.htm
- 谷口忠大（2012）「書評を媒介としたコミュニティデザイン ビブリオバトルの実践」計測と制御（51）8号 pp726-731
 〈知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト（bibliobattle.jp）〉
- 岡野裕行（2022）「ビブリオバトルと子ども読書活動推進計画」図書館界 Vol.73（5），pp438-443
- 勝山博子（2020）「ビブリオバトルにおける双方向コミュニケーションの有効性」常葉大学短期大学部紀要（51）

徳永加代（2020）「読書への関心を高める実践的指導力の育成」 言語表現研究 36 pp17-29

鈴木貴史（2016）「保育者の絵本選択における言語表現重視の傾向とその課題 保育者養成課程における絵本ビブリオバトルの実践から」 帝京科学大学紀要（12） pp147-153

泉村靖治・青山禎尚（2014）「学校教育の場におけるビブリオバトルの教育的利用についての研究 ―主体的な学習への仕掛けとして―」兵庫県立教育研修所研究紀要 125、pp39-46

菅沼敬介・岩崎千恵（2018）「ビブリオバトルをツールとした学級経営の研究」福岡教育大学紀要第 67 号第 4 分冊 pp269-277

A Study on the Effectiveness of Bibliobattle in Fostering Reading Awareness

Takashi KAWASHIMA

Abstract

This Study conduct a Bibliobattle exercise, a questionnaire survey, and a survey of the lending situation of books in university libraries targeting university students who are said to be losing interest in reading.

The purpose of this study is to clarify the actual state of reading among university students and how Bibliobattle can contribute to fostering reading awareness.

As a result, the following three points became clear.

- (1) University students do not necessarily dislike reading, but are fully aware of its importance.
- (2) Bibliobattle was found to be effective to a certain extent in fostering reading awareness. Specifically, “interest in new books,” “realizing the appeal of books,” “stimulating motivation through recommendations,” “encountering new genres,” etc. were born during Bibliobattle. There was growing interest.
- (3) Changes in reading behavior caused by Bibliobattle are temporary.

In the future, I would like to further consider ways to use BiblioBattle to foster reading awareness while taking advantage of its original functions.

Additionally, in order to continuously change reading behavior, I would like to think about and create initiatives that are not temporary, together with students.

Keywords: reading awareness, Bibliobattle, college student, reading behavior,
Away from reading